

## ◆ 巻頭言

## 子どもの目

## 大島 かおり

ご存知でしょうか、暴力家庭の子どもの心がどんなに傷ついているかを。私がそれを痛いほど感じさせられたのは、DV問題の取組の先進国であるノルウェーの絵本を日本に紹介したいという女性たちのプロジェクトに、翻訳の面で参加してからのことです。絵本はこの夏『パパと怒り鬼』（ひさかたチャイルド社）という題で出版されました。原題はSinna Mann（怒る男）、普段は息子をかわいがる優しい父親の胸奥にひそむ怒りの塊りを擬人化した表現ですが、私たちは思い切ってそれを日本語で「怒り鬼」と名付けました。この絵本の一番の特徴は、DV家庭の幼い男の子を主人公にして、すべてをボイの五感を通して描いていることです。パパの内面の暗い地下室からいつ這いあがってきて暴れだすかしの「怒り鬼」、「しあわせ家族」の幻想から抜けられず暴力のまえに無力なママ、そしてその光景に目も耳も口もふさいで必死に耐え、大好きなパパの変貌は自分が悪い子だからかと苦しむボイ。子どもはふつう、こういう情景や恐怖に明確な言語表現を与えることができません。ですから著者は子どもの語彙を突き抜けて、比喩の力で子どもの脳裏に渦巻くイメージを言語化し、畳みかけるようなリズムミミックな語り口で物語り、画家のほうもボイと同じ背丈になって、ボイの目に映る情景と内面の心象を写しとっています。翻訳での難題はそれを子どもに理解できる表現にどう近づけるかでしたが、子どもの言語的感受性と想像力を信じよう、下手に噛みかくだいた表現で原作の魅力を傷つけてはいけない、と思い定めました。

この本のもう一つの特徴は、暴力の被害者には「話してごらん、だれかに」というメッセージを送り、加害者には自分の中の「怒り鬼」と向きあうことによって更正できる可能性を伝えていることです。日本にも数多くいるにちがいないボイたちのためにも、被害者の救済だけでなく、加害者自身が暴力への依存を断ち切るのを援助する試みが広く行われるようお願いしてやみません。



## PROFILE

大島 かおり  
(おおしま かおり)

翻訳家。主な訳書:M. エンデ『モモ』、アドリエンヌ・リッチ『嘘、秘密、沈黙』、『アーレント=ヤスパース往復書簡』、ノーマ・フィールド『天皇の逝く国で』、ローザ・ルクセンブルク『獄中からの手紙』等。

ここ10年ほどは、血縁を超えて女から女へ精神的・物的遺産を伝えることを目標にした「女の空間NPO」代表を務める。